

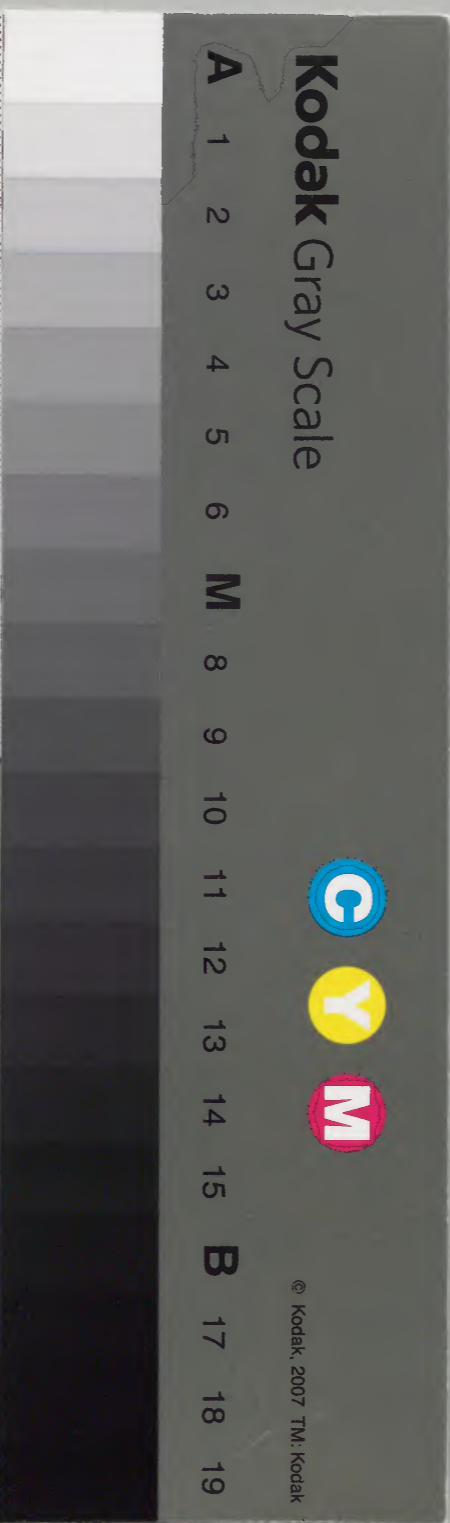
鹿兒島藩名勝考

二

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | 九 | 和 |
| | | 一 | 一 | 書 |
| | | 二 | 六 | 門 |
| | | 三 | 四 | |
| 三 | 七 | 三 | 四 | 類 |
| 冊 | 架 | 函 | 號 | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 庫 | 文 | 閣 | 内 | |
| 毛 | | 九 | | 和 |
| 函 | | 一 | | 書 |
| 三 | | 六 | | |
| 架 | 三 | 四 | | 類 |
| | 冊 | 號 | | |

| | |
|------|---------|
| 内閣文庫 | |
| 番號 | 和 9164 |
| 冊數 | 3 (2) |
| 函號 | 176 126 |



速日峯

日向風去記云速日郡此所有小云速日
峯古日神之御速日郡此所有小云速日

高智保神社

靈驗賦錄高智郡本通紀震島山今作西

奉祀瓊女持尊余未花開耶姬火火出見尊矣夫

心以對障亦合尊亦在依姬之神武帝告云

前東府東北十五里在高千穂峯之西麓

日本紀曰天津彦火瓊杵尊天降於日向襲之高

千穂峯矣續紀延曆七年秋七月己酉太宰府言

去三月四日戌時當大隅國贈於郡曾為峯正火冷

大熾響如雷動及庚時火光稍止唯見黑烟然後雨

沙峯下五六里沙石委積可二尺其色黑焉其後

宝曆中大冷たり雨石如雹來々負載量席避道之

方五六里瘞埋由疇

續紀兼和四年八月壬子日向國諸縣郡震島岑神

預官位今按霧島岑即高千穂峯也故小其郡

三代實錄天安二年十月廿二日授日向國從五位

上高智保神從四上今按同日日向國霧島神

後より是今の東霧島

萬葉集曉天平勝寶八年丙午六月十七日大伴宿

禰家持作一首日向國高千穂嶽今按天平字

位下大伴宿禰家持為蓋摩守と統

此致疑、家持の國よ就し時作れり所

久き遠くありて現たあられたるありし

るべき神の跡代ももたす成たよきなり

あふあふとをばたけし海も久遠の事なればはたはたし
みまゝにゆきまゝにありて山川を以ては縁なきことありて
高きなるにたふしちちやゆき神をよむ事なるといへぬ
ひまを九なりし事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
事の同じのしるしはなればはたはたしき事ありてはたはたし
めりてはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
き事ありてはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
たふさうむけたむけたりしものことありてはたはたしき事ありてはたはたし
めたりしはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
き事ありてはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
わがの事と自以てはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし

やまの事ありてはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
よはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
よ中津曲りてはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
崇光皇太子はたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
○ 外はたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
氣をたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
たはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたしき事ありてはたはたし
神代評註進曰我秘記稱皇孫尊天降之時春村

雲扈從皇孫訖之曰云乃取天忍石之長井水誨之
曰齋下此水云云即時崇定日向高千穗宮御井奉
仕矣尔後移居於丹波真井風雅集下度會延誠世
○後宇多天皇弘安四年山七月朔日元史作八月日
和漢置國之異
蒙古襲來の時天使當社文賦の瘴風成瘴人
為小奉幣ありし時瑞の事霧多靈應
記見し前多義弘云物鮮海の時の所
甲曹級あり甚高宮内治小侍承知りし肉疎は

神像以奉置之保古良あり時全根成液

桑原郡國分郷府中村府中村古の大隅國

原郡府あり持統天皇諸國今

氣色杜杜今俗去字成用木

杜中有天神小野天神也傳記遺矢不可考云耶

府東八里

千載集

待受の地

此のく

社乃り

五

拾遺 無法

清く

東月

中

秋

康

り

古

同

名

名

名

子首同

月

明

有

春

中

鳴

秋

う

夕

夕

夕

又其間... 左邊中... 時雨... 杉... 中... 大... 鹿... 鹿... 鹿...

鹿兒島同郡同郷宮内村

鹿兒島神社... 延喜式 鹿兒島 石清水傳記

奉祀... 彦火火出見尊... 延喜式 鹿兒島

延喜式神名帳曰大隅國柔原郡一座大...

鹿兒島神社... 石清水傳記曰鹿兒島神社彦火火出見尊也

與宇佐八幡不同欽明天皇五年... 神切皇后應

神天皇仁德天皇稱之四所宮... 是稱八幡之帳

七

於此後... 信... 巫カ

謹按國史謂兄火闌降有海乘身彦火出見有山幸
夫山海之幸其為何事乎未可知也而觀於易釣獸迹
之言則所謂幸者漢獵之謂歟赫々皇兄茅山海漢獵
豈所宜然哉意有說蓋出見所執御弓箭乃天璽所
謂天施方天羽矢是身故出
見曰夫幸天神之所授也夫大隅鹿兒島廟地出見所
故與吾之私事見天書
都同鄉年久城慶長十年前大守義久彦自同
鄉畠隈移城於此時改名新城闌降
居処之墟而其間相距不遠蓋闌降既自伏罪幸使之
居焉亦可以想見出見寬洪仁愛之至也初瓊々杵傳
出見治邦内域以山川之職闌降知海江之事而江海
之幸利不如山川之大且使矣此乃取以兄之欲易幸

也其意奚翅欲易之抑又欲并奪而已矣故各不獲其
幸無怵無意乎此而在乎彼也幸之以茅夫其一釣為
之說將至殘害逐之於海鄉之遊其詭巧可知也本
所謂赤女蓋蓋女也探口者坊間也闌降屬蓋女盜
取出見所易持之釣釣此釣釣則猶如天施弓之屬專
符驗也兄之閱其茅既不危乎幸不逮乎大逆叛
蕩者先代遺老尚有在也

同郡同鄉同村一

奈毛木杜古今集藻塩草天上
奉祀蛭兒稱三宮大明神蛭此種蛭此種
社記曰是蛭兒の傳子最初の處所あり日本紀曰
伊奘諾伊奘丹二尊日月二神此次生蛭
鬼雖已三歳脚猶不立故載之天磐樟船而噴風放

此の御手紙は... 甚だ御承知に候なり... 御承知に候なり... 御承知に候なり...
^{是れ}御手紙の御返事...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...

此の御手紙は... 甚だ御承知に候なり... 御承知に候なり... 御承知に候なり...
^{是れ}御手紙の御返事...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...

此の御手紙は... 甚だ御承知に候なり... 御承知に候なり... 御承知に候なり...
^{是れ}御手紙の御返事...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...
^{此れ}御承知に候なり...
^{是れ}御承知に候なり...
^{此れ}御承知に候なり...

まゝにむすむすをたあらはしむるにむすむすのたはりん

贈於郡國分郷上井村

韓國宇豆峯神社

蓋空虛の義あり作辛國城加羅

延喜式神名帳曰大隅國曾於郡小韓國宇豆峯神

社

宇佐記曰欽明天皇三十二年二月癸卯豐前國

宇佐郡菱形池上小倉山邊有神訖三歲兒告異人

大神比疑曰辛國城八流之幡降

我是日本人王十六代譽田天皇廣幡八幡麻呂也

今按有八流之幡降當時有天皇附語於人而見神

靈之事故朝延詔使附幡於諸國以祀天皇之靈

又按有八幡之稱其事又出於雨夜芳洲先生諸錄于

北而所記亦天皇之靈然神傳云祀天兒屋命也

尚道是國前高麗土記曰高麗國意山郡余屋命也

此說也而當社所祀則五嶽命神而余屋命神等

也此神在筑紫或掌種樹或慶得神地或為韓神等

其使而曾取理添以義所謂與名州曰之峯此韓神

韓曾防理神之備也韓神掌理曾素交鳴等之武以韓

神與倉海分掌其地隣接于西或以辛鎮邊焉此韓

是也申此則韓國神家子韓邊也或所謂韓神焉故

祭之西則以鎮異職如辛國城亦曰以神故焉但曾

要害左右副之謂者恐未瑩也備虞外惠也按檢

同郡同郷上小川村

年人城の今後高大人集人神故城也城在月是火關袋

大人集人記曰大人孫去而石上小川村之内拍

子格... 日本武命... 古倍... 武... 河... 魁... 俗... 大人... 日本... 侵邊境不止...
武命... 古倍... 武... 河... 魁... 俗... 大人... 日本... 侵邊境不止... 武命... 古倍... 武... 河... 魁... 俗... 大人... 日本... 侵邊境不止...

遣日本武尊... 襲國... 形... 師... 髮... 容... 酒... 叩... 火... 大... 威... 以...
武尊... 襲國... 形... 師... 髮... 容... 酒... 叩... 火... 大... 威... 以... 武尊... 襲國... 形... 師... 髮... 容... 酒... 叩... 火... 大... 威... 以...

而殺之故稱曰日本武尊云云既而又征東夷云云
其詞畧因遣吉備武彥奏於天皇曰臣受命天朝遠
征東夷則被神息賴皇威而返者伏罪姦鬼自謂是
以卷甲載戈置於上道冀易日曷時復命天朝然天
命忽至臨駟難停是以獨臥曠野孰與語之豈惜身
忘惟憂不面遂崩于能褒野持羊三卡天皇聞之寢
不安席食不甘食晝夜唼咽泣悲標梓因以長嘆曰
我子少確王^如神武^子昔者熊襲叛之日未及總角
久煩西伐既而恒在左右補弼不及然東夷騷擾無
可使討者忍愛以入賊地無一日不之顧朝人進稟
侍待選日何禍何名不意之間倏然亡我子矣而今
而後與孰人俱經綸鴻業哉乃詔群卿命百寮於

伊勢國能褒野時日本武尊化白鳥從陸出去云云
是云陵曰白鳥是歲天皇四十三年為神武天皇二
皇孫正八昭宗之廟側日集風宮之齋祠於日本武
尊等大人年人成討々々力劍以神神とてそ成祀
神武天皇蓋嘗州正乘而或利て務々々々の懐劍ある
風起之同郡同鄉^村武備志^同皇^宮亦^一里許^許
神造島林^少樹^瀨武備志^同皇^宮亦^一里許^許
大穴持神祇^續小^林の^記海^邊其^處神^靈在^り
奉祀^大正^貴命^皇左^大年^神命^命
續^皇神^祇稱^德天皇^天平^神護^之年^六月^己丑^大隅^國

神造新島震動不息以故民多流亡仍加賑恤
 又曰光仁天皇宝龜元年十二月神護中大隅
 大國之海中有神是為其名曰大穴持至是為社焉
 以大穴持俗後て...
 延喜式神名帳曰大隅國曾於郡小大穴持神社
 或云...
 島の三...
 附卷天...
 富隈...
 文祿五年七月十日...
 時...
 此地...
 後...
 相良某

其宅...
 高の...
 之...
 龍伝云...
 神...
 同郡清水郷姬木村

風社...
 府東北八里餘...
 方角集...
 招み...
 續拾遺集...
 十五

凡れ

新の寺成を...
 或云本枝林ハ...
 風半ハ...
 の四字...
 此寺明寺是古刹...
 園中...
 是古刹...
 其銘云...
 貞勝取白馬...

近仰於靈...
 北鐘改昔...
 一月十九日...
 勸進者當山...
 行と記せ...
 今其又一...
 官朔進之...
 月大中臣...
 任僧等...
 國司代...
 十日臺明...
 者无縁...

新字之時彼被足箇竹貢御取後造四百餘歲根本天伽
 藍也蓋因又建長三年臺明寺勸進牒之内夫以臺
 寺者天下無雙之靈窟人間第一之梵宮也云云且
 老相傳云天智天皇御宇青奈葉葉箇竹貢御取自
 被定最以後五百八十九歳云云可遠往生淨土之
 際敬白建長二年八月九日勸進衆後本敬白深者
 大法師判野所謂箇竹今在箇四時青梨葉葉甲也乎
 株よりこの吾高の毛久たひるも以多代を糸も單あり
 中束をさきの今箇竹取多しとの鮮あり後守物
 の應願願皆ありとの如も等等はるべき此竹の葉曲曲
 余表念を奉りて著は法のの本番物を志竹篠の中
 立詳録に寛政丙辰冬十一月九日本府の儒居よ

抱りて象祭り候は西暦長祿葉表天皇御時
 同郡曾於郡郷重久村竹宮に在り是時高直
 夕暮閑此女表かたかたの二夜より候り候思領領松松
 皇仁閑村より高直と云々の事あり
 府北八里半
 又云く直入毛山寺寺は
 山形同郡福山郷宮浦村此古傳高直天師
 宮浦神社亦表高直無刻
 府東九里餘麻此古傳高直天師
 吾奉祀天神七代地神五代神武天皇此古傳高直天師
 延喜式神名帳曰大隅國曾於郡小宮浦神社
 高直此古傳高直天師和名高直此古傳高直天師
 肝屬郡内浦郷北方村和名高直
 和名高直此古傳高直天師
 同書編作起此古傳高直天師

武備志作肉浦

高屋山上陵作鷹紀和名抄

日本紀曰彦火火出見尊崩於日向高屋山上陵是

也。延喜諸陵式廟陵記曰高屋山上陵彦火火出

宮見尊也在日向國無陵戶

山陵在山上名曰國見山麓有廟號高屋大明神

高屋山蓋地名也又左方有天子山者景行天

皇行闕處故名焉

日本紀曰景行天皇十二年秋七月熊襲及而末朝

貢云云十一月到日向國起行宮以居之是謂高屋

宮十二月癸巳朔丁酉議討熊襲於是天皇詔群鄉

曰朕聞之襲國有厚鹿文迹鹿文者是兩人熊襲之
美渠師者也衆類甚多是謂熊襲八十泉師云云十三

年夏五月悉平襲國因以居於高屋宮已六年也

今按襲國即今之大隅國俗云下大隅圖書編

云其南濱海之界為什磨鳥思速是也又厚鹿

文迹鹿文ハ蓋今の大隅風土記云髮梳村髮梳者年

大隅郡俗語久四部今改曰串下郡和名鈔髮梳者年

郡串伎今俗作串良鄉有東南十三里又隣鄉

高隈嶽高山之内也

武高小同郡始良鄉上名村

吾平山陵日本紀吾平郡始良鄉也

日本紀曰彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩於西列之

宮因葵日向吾平山上陵是也不西謂高和德壽統

高延喜在表式廟陵記曰日向吾平山上陵彦波瀲武

鷓鴣草不葺合尊在日向國無陵其山

吾山陵在大巖洞中窟中濶五由餘步祠其山又東前

隔小川有廟是謂鷓鴣草權現始尊誕聖于同國向日

那珂郡宮浦鷓鴣草濱故廟諱因具生土示不忘初也

と今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名 菱刈郡今名

奉天底津少童傳日本紀其在朝蓋被除の遺低
 神廟の四周皆鳳尾蕉數万株偃鬱青翠大者六九
 松の如く其中神廟に至る僅に一徑以通せり
 大御岬即大隅の隅極みして南海に突出せり
 と數十町皆盤巖增疊雲濤曠幻ありと暴風怒
 浪盤渦て潮脈極く無度弘舸巨艦といへば誤る
 其際或は暁を以て瞬息の間或は霧を以て或は
 蓋東海の中尾同伏無てふものあり因よち
 あり小舟の如きは船も此の波に砕かれ七
 の半は散るの新聞あり舟人満潮の時候候ひ

舟の便利と云ふ
 想ふ所あり

景亭と名づけたるは面云警法神位名を云ふ行二与果
 舟乗風不易達意以未遑向津一日去其住持石上
 人必想島四極遠矣索其舟而舟出燈を以て舟乗能
 然見日持亦可釣畧其島中烟景也見其舟人乗持能
 舟乗能回春我船而致洞谷漏上人未語予不喜就元
 舟傳舟為予以未至之能保乃不云舟以予不文不
 得舟を不止猶固純心公繪畫以示且述其山居於
 唯洞奇句魚標壯鶴野十月之花之風之徒漢奴藏
 舟之能九分五五分也

二十
香玉珠玉極其命占其巧為名存不可得指是則標為
魚肉樂也予究其法若喜且憂亦固為於書以湯之
皆廢其家之虞陽月可福存焉水者其神極庵氏疑
東山使院中其意之為物也其意之不為不為不
櫻島四福次來石止大既後前之其法亦亦亦亦亦
此其春亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦
遙指甲山外亦天枋為花候後者連鐵四銘恒棚棚出
否更勝其也其法其法其法其法其法其法其法其法
是事其夏其法其法其法其法其法其法其法其法
奇路切究信地博其則其其其其其其其其其其其其
覽筆流其小後和其人其人其人其人其人其人其人
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

本則靈煙怪石堆起亦在亦落益春鬼亦必欲欲其山
少免情遠風浪亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦
下其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其
候當其月後經神其緣其亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦
雲中雲柳地深為其其其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其
奇峰傑出海之天路其其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其
深其嫩結兩塊憐下映滄俱上映天四而暇凡生其其
宿原吹入釣魚船八其其其其其其其其其其其其其
黃葉樹其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

黄葉紛々浪作堆玲瓏巖壑在鳧香山有月分明現
 蜃氣勾連爽氣乘
 野水秋秋
 皇允山客未殊坤意如松籠補廬痕檀栢玉樹多々出
 疑是遠萊蓬萊奇
 春平碧谷
 任瑞陽對秀山支那道奈草森書
 同郡田代郷大原村山中花瀬川とりあり府南
 新書六里川の洞二掛向修長音賦許字面石檀平等
 ありり河水の深すま
 古風
 中河商

正見桃花流依然錦紅色ありあり名流
 流ありり
 思
 陽
 櫻島
 天
 山
 湖

又月夜見尊火園降命とは配祀を以て
免致す島氏其名成謬を致す事あり月
夜見尊成身祀未と成りて
續日本紀天平寶字八年西方有聲似雷非雷時大
隅薩摩兩國之界烟雲晦冥電去來七日之後乃
天晴於鹿兒島信奈村之海沙石自聚化成三島炎
氣露見有如石鑄之為形勢相連望似四河之屋為
島見埋者民家六十二區口八十餘人畧下
鳥鵲洲沖小島沖小島大隅郡鹿島西南
對し當り共り人係り最り思ひ願
今按續紀新我按島海出ありて其化成云島の

本朝文粹櫻島忠信落書大御前御伊豫守時
陽春詔勅多哀樂兼兼盡閱有米叩頭曰官爵專非功
課賞公私寄致贖勞求除書久待負書致直物
遲期獻物叔故太閤賢婦衆望左丞相後損皇猷
忽逢魚水恩波瀟共見駿河感淚流雖向和風櫻
獨吟被露暖露橋先抽時近臣貧欲世間歎外吏沈
論天下愁言費用金銀并萬兩并結亡山海才三列公
而依是落書拜任大隅守云云林子曰是見文粹其
詳曰依此落書拜任大隅守云云按古事談有忠信赴
大隅之任然不記何代人則无可考為文粹日本

猛焰沸騰於焉使潮勢溢陸海邊居屋漂室穿墻其患
亦夥魚龍焦殺蟲介熱傷舟楫常有飄蕩之恐覆溺之
虞至若夫鬱煙歆然地不知幾重疊上之聲九霄星斗
要醒疾風已敢披散烈聲呼也礮礮連連聽下之響
八挺膽寒魄魂不測獲將何作硫黃臭氣時熏莫不掩
鼻屢生忌嫌晝夜隔火燁之雷厲電激寒以森之掩時
焜燁須臾千態俄頃萬狀則不可窮盡諸筆言也而以
洎盪歲九年甲子其火勢浸微又閱月餘炎殆息突然
出現者即安永島也安永島之出亦未不可頓知之或
曰泥沙之凝滯或曰浮石之化聚或曰出沒易於隱顯
有時昔者所觀今則無之今且所成如明日何抄忽之
間難巨細認之頗似有鬼神陰來相之異言相喧貽街

談交紛紜若是蓋期年完然島嶼正新成焉既而分出
列見者凡以五數其二以癸亥十一月六日丙戌見是
為豚鬼洲以庚戌年最大其一以甲子四月六
日甲寅見是為東洲以甲子年其一為水花洲以甲子年
其餘差小俱合而名之曰安永之島以安永年備出也
遠望瞭乎若積雪堆然蓋距櫻島可半里北瀕福山鄉
而其最大者周匝一里許長於東西北背隆高南面夷
平數百步茅艸叢生其上燕鷗來巢子茲於是乎漢容
蚤人亦可以上泊碇宿也予嘗按續日本紀云先仁天
皇室龜九年十二月前此神護中大隅國之海中有神
造島其名曰太穴持至是為社焉今以為小島是也予
謂海中之島往往而在顧豈有神造之理疑史或為之

說或曰神造猶言天造也予也惑焉今乃會安永島之
 成因再謂夫有物斯有理天地中間未可曾言物而無
 之原野拾碎散山壑遺蠟房光天之世亦近乎况夫
 造物者之無極以眼前智欲窮之則易以虫々愚深疑
 之滋惑矣凡是皆不能盡所以為其理者也己矣然則
 神造涌出亦何擇焉今也於斯安永島自人觀以為世
 固既不無之而未聞貽疑於其間者也如予嚮有疑於
 史可謂為愚所觸矣乎昨之所惑於彼今則矣於此遇
 欲記安永島之狀故並論之庶余私以備後之莫面觀
 之而或有疑於斯島者云云是日其日甲子四月六
 天明五年乙巳某月日記某史十六日丙辰是日
 楚文保熊毛郡益保名多熊毛久未述其言說而後出

蘇轍島續日本紀後見日本書紀多爾者指是所餘の
蘇轍島平長明也法錄作多爾島海東諸國記明本霞葉兩朝
蘇轍島是作今乃所書上佐磨登壇以亮等作
 西國府東南三十九里周匝四十五里西去益救島
 日本分七里村數十八夫其曾蓋奏獻是海島蘇大
 古をも今の爲るを以て蘇轍島の二名とすて多爾
 島と稱て一國とす國邊氏命を祀矣蘇轍島蘇轍島
 蘇轍島の臺波野馬の月平正於上國史多爾島以
 係系乎以は板奉よ邊り於此二三年改板奉
 南島志引日本紀曰天武天皇廿一年秋所遣多爾
 島使人等貢多爾國圖其國去京五万余里居筑紫南
 海中其國類稻常豐三道兩叔所謂多爾國疏求也當

是之時南海諸夷地名未詳或因某路所由而名多爾
島即路之所由又太室中係益救島於多爾島置能滿
益救云郡以為太宰府所管之一續紀文武天皇
三年秋七月辛未多爾等人從朝幸而貢方物授位賜
物各有差。和銅七年四月辛巳給多爾島印一圖。
天平五年多爾島熊毛郡大領安志託等賜多爾後國
造益救郡大領加理伽等多爾直見日本後紀天長元年九月大政官謹奏停多爾島隸大
隅國事右參議大宰大貳從四位下小野朝臣峰守等
解你證檢案內大政官去二月十一日府你件島南居
海中入兵之物在於國良非杆城又島同一年給物准
稻三万六千餘束其島貢調鹿皮一百奈領更無別物

可謂有名無實多損少益右大臣宜奉勅宣勅利害
言上者南溟炎之無國無敵有損無益一如府旨須停
島隸大隅國計其謀口不足宜鄉量其在地有余一郡
能滿合於馭謨益救合於熊毛四郡為二於事得便者
聖帝登極事期濟世明王布政理貴適時臣等商量昔
漢元帝納賈損之言罷珠崖郡前史以為美談後世稱
其英烈雖建國量疆非無分野而恤民救急猶矣列郡
况溟海之外費損如此加以往還之史漂亡者多運送
之民蕩沒不少守無益之地損有用之物求之政典深
違物議伏望依件停隸以省邊弊伏聽
天裁謹以申聞謹奏聞

同年十月丙子朔停多爾島隸大隅國

國神村所祀之神其類大異而各異
 浦南神社神補^神云無毛大權現是也。和漢
 書奉祀大彥大出見字音華不合等
 神伏卷塩土傳曰熊毛郡熊冠神社是也此島中
 の美景を港口東北開き東風吹浪打つて又
 堤村熊野浦田月港あり川の曲三巴あり
 其時大船を泊り登岸唯赤尾木成を總番と
 全接後漢書倭國列傳以柔宜洲と名知り
 作壇焉云日本之地内を所居智宜洲多是
 多禰島と名知り其地多是禰島と名知り
 島考云出云の島無毛大權現是也。和漢
 書奉祀大彥大出見字音華不合等
 神伏卷塩土傳曰熊毛郡熊冠神社是也此島中
 の美景を港口東北開き東風吹浪打つて又
 堤村熊野浦田月港あり川の曲三巴あり
 其時大船を泊り登岸唯赤尾木成を總番と
 全接後漢書倭國列傳以柔宜洲と名知り
 作壇焉云日本之地内を所居智宜洲多是
 多禰島と名知り其地多是禰島と名知り
 島考云出云の島無毛大權現是也。和漢
 書奉祀大彥大出見字音華不合等
 神伏卷塩土傳曰熊毛郡熊冠神社是也此島中
 の美景を港口東北開き東風吹浪打つて又
 堤村熊野浦田月港あり川の曲三巴あり
 其時大船を泊り登岸唯赤尾木成を總番と
 全接後漢書倭國列傳以柔宜洲と名知り
 作壇焉云日本之地内を所居智宜洲多是
 多禰島と名知り其地多是禰島と名知り
 島考云出云の島無毛大權現是也。和漢

羅叔舍来多禰島赤尾木湊傳鉄砲術於多禰島地條
 時亮見後太平記江源武鑑九州記及南浦文集其製
 原出自西蕃波羅多知兒國今考其說始て種子島に
 ても、^傳南浦文集の説其実を得たり明石掃部公
 事^北に傳説也又按海東諸國記曰庚寅三月遂與
 宗義^智等同發時義智^獻二孔雀及鳥銃槍刀等物命
 放孔雀於南陽海島下鳥銃於軍器寺我國之有鳥銃
 始北、何氏兵録曰中國原無鳥銃傳自倭夷始得之
 此與各種大器不同利能洞甲射能命中予矢勿及
 經國雄略曰鳥銃傳自倭夷十發九中即^死鳥皆可射
 落因是得名夫鉄砲の創始て本藩より傳て中洲に
 傳り而後朝鮮に傳りて又日本に傳りて其詳其

郡と述ぶ其妙を窺ふとものゝ如き固是あり或謂高統
 其機謀の殺真徳鏡陰謀なり凡西洋人奇巧曲致
 支那及びその諸島に於て其天を及ぶ教
 此其の如き月氏の法跡を及ぶ我が國に於て其教
 此其の如き月氏の法跡を及ぶ我が國に於て其教
 益救島善武 兩朝平壤日本紀 夜句續紀武人 益久山夜古
諸國 野古記 今作赤屋久同書 編作際諸島 琉球國志器作
 府南四十八里周匝三十五里港五太水村落
 日本紀曰大推古天皇三十八年掖玖人來 文障書流
 求傳作邪久唐書作邪古者並是今の南海諸島に混

衣祿するものありて今の取模郡一島成行言はる
 其の別ありは通源白琉球と世に與掖玖同其名不
 謬亦琉球を或指益久而言世法録海具亦可證也按
 今南島人七島成接木て土喝刺とけふ是は古土喝
 刺の其上島多諸の名あり掖玖亦此方の陸に近き
 端島中々南島成呼て邪久と云ふ當時南島の名称
 未傳の事なり 琉球國志 今より言はるる琉球國志
 續紀 文武天皇三年秋七月辛未夜久從朝奉而貢
 方物授位賜物 元明天皇靈龜元年夜久來朝各貢
 方物其詔後久是亦今の琉球なり 琉球國志
 同紀 聖武天皇天平五年六月丁酉多羅島熊毛郡大
 領外從五位下安志託等十一人賜多羅島國造姓益

救郡大領外後六位下加理加等百三十六人
直能滿郡大領外後八位上東磨等九百九人
直姓其益救能滿二郡今の屋久嶋ありて此間既
多親島と隸けり故よ別益久嶋の名を以て沿革
に至りて穴種島條正見たり又按天平五年熊毛益救
能滿の又等よ朝廷命して官姓を賜ふ通計一
千一百十人なり其子孫を鶴と化けたり後と
ありて今に至りて今よ至て遐胃遺族とありて
益救を今種子屋久の島民は平氏の殘黨文治乃
餘燼の遺乃及び其の遺るるを以て其の亦其
祖次郎を其傳と存すよとありて其の詳所は其
考へたるに

同紀 孝徳天皇天平勝遠六年正月癸丑太宰府奏
入唐副使後四位上吉備朝臣真備船以去年十二月
七日來着益久島自是之後自益久島進發漂着紀
伊國宇漏崎
八重嶽 八重嶽の峯山の麓宇漏崎の島中の奇觀勝
屋久の一名相陽を以て其層巒重嶽錯峙羅
列若新若聯八而萬城を以て故を以て蓋地を以て
八重又隈路の如く此を益久島と稱す
益久島の北に山あり其峯翠巖崖ありて未
曾て禿竜の若くは樹縁松鬱を以て其
云よ益久島を以て又益久島と稱す

此山又ハ後方ハ其方ハ一死象ハ其山ハ下流川あり
直深至愈底絶壁天垂或瀑布所カ流洞百道以て其
直が深くて予山久雪百川之水行くと其ををりて
見ると其中殊絶なり其山高きなり其の深御嶽と
一山向空の浦嶽三日永田嶽三日栗生嶽三山對立
能及形鼎足の勢あり其麓の道為交條あり三峯の
峰頂四時氷雪堆積を其凌嶠赫々大衢より文々
八穿氷凌く其のみに此のめく山腰常は雲霧常来
時に西面成辨くく一衆峯の四造ハ巋然たるハ死
其石鬼跡が毒如刃擁從者自ら似たり其唯海より
八七島が臨み此の數十嶽峰ハ三峯の深深遠を在
固ホ蓋星嶽勝覽所評重曼山山海經日月所出不靈

水乃ハ此の山峯成指りしものりりもろるる
花江川ハ刈谷カフ川ハ久方言ハ川の所カハ
燕巖ハ神花チ樹ハ天奇石環ハ其水ハ景
郊原ハ寸至てハ初人達客筆言及ハ其奇勝
長谷ハ神仙秘區と稱ハ其山ハ瑞池と云ハ其
剛至若嶽等ハ出據本嶽ハ勝景ハ不
上古ハ宮浦村一品浦

益救神社ハ歌瑤賦ハ俗語ハ品良者権現又嶽権
宗奉祀本彦火火出見集得林全知子雲ハ命出
延喜式神名帳曰大隅國馭羨郡一屋並久神社
宮浦八景
或前書宮品浦夜雨大山吐對商谷夢遊西人遊窓

近渚篝燈小陰雲度大江却侵商客夢微雨入船窓
 芦花多似秋風吹落葉正愁人處
 秋風吹木葉明月玉象秋影擁金波色瓊々滄海風
 穩坐紅雲山の影
 潮酌淵常燈雨
 關至松間靜孤燈徹夜寒幽魚窺影衆渙艾下釣竿
 未去
 父本寺晚鐘
 樵爨江村暮紙鐘棲鳥啼為憐金刹曉使物動清機
 杉村山多
 羽神嶽瀑氷

水勢割山涌千尋素練懸神龍蟠屈延時可止青天
 山
 石身後藤原夕照
 郊原低接海天際都斜裡林外酒家在燕漁多醉歸
 夕日
 城之平舊迹
 上古采城迹
 群岳拱其下
 香の山
 蘇味南境之山嶺松

亦戸曰鎮座神書鈔曰在吉大神其荒臺在筑紫之
赤坂和豐神功皇后征三韓之時陰臨其體而顯坐撰
別位云撰肆風出記曰所以稱在吉者魏朝時到於高
名長岡之前齡雄略乃謂斯實可任之國遂讀稱之曰
真住吉在吉國因是定神社今俗略之稱須美乃叡云
○滋川春海曰夫天文者造化之首於筑紫甲向小戸
測日之三天悟西曜之道曆法者天皇之元於華
夏和列檀原序年之四時隨天道之影自爾以降爲
神聖之政事也我國立天統當與天地無窮者矣所以
諸國士道亦准之正姓撰氏國子連綿而垂示今所國
無倫矣以下續紀聖武天皇天平九年西曆
明乙巳遣使於伊勢神宮大神社筑紫住吉八幡二社

及香椎宮奉幣以告新羅無禮之狀今按當社記曰長
門國豐浦之住吉筑前國那珂郡之住吉後世所勸請
也然續紀所載恐不當社あり又按大隅郡佐
多郷坐御埼六所權現之住吉三神及止津少童
命亦六神を奉祀を蓋伊弉諾守被除の所あり
西の海乃歌證たるとあり

西の海乃歌證たるとあり
あつた海乃歌證たるとあり
揚子江の海乃歌證たるとあり
西の海乃歌證たるとあり

田の成り候を初よ奉り候間都云移備云...
 一丁云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...

うきうき... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...

大隅国名所未考
 茂社 移備云云... 山中... 近考

以上大隅国終
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...
 移備云云... 移備云云...

日向國

舊事紀曰朝日直映國夕日日照國是日向

小野東望日向國和名曰日向國直向於丹

其日向者日向神之名也日向國直向於丹

云日向者日向神之名也日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

穗大明神祠

奉祀伊奘諾尊也 祭禮十一月廿四日

府東十四里餘

同郡末吉鄉南鄉村

穗原

日本紀曰日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

日向國直向於丹

中瀨 下瀨乃流瀨源也松方云云

云云橋之新築云云

一之風色亦云云

勝蹟云云

紀其自橋云云

計其自橋原故蹟記云云

日刈橋之橋原正古之神迹也

國書神代卷曰伊弉諾尊當滌去吾身之獨穢則往至

筑紫神向水戶橋之橋原而被滌焉遂將滌身之所汚

乃無言曰上瀨是太疾下瀨是太弱便濯之中瀨也因

以生神号曰八十狹津日神次將矯其柱而生神号曰

神直日神次太直日神次沈濯於海底因以生神号曰

底津少童命次底筒男命又潛濯於潮中因以生神号

曰中津少童命次中筒男命又浮濯於潮上因以生神

号曰表津少童命次表筒男命凡有九神矣其底筒男

命中筒男命表筒男命是耶任吉大神矣底津少童命

中津少童命表津少童命是阿曇連等所祭神矣今郡

吏藤原久行語覺鳥誼方神至藤原信秋曰我生神國

尊崇神明且吏此郡也豈不亦至幸哉願增奮制以穩

我懷信秋感其恭敬之志共以告諸大夫守源中將志

久朝臣朝臣載喜載命乃令信秋圖其地形而屬予作

之誌予按地圖則河水映帶山巒逶迤宛如展輶川圖

矣其崛起乎中央龍從撐天香橋嶽也麓有真津男神

仕而面中瀨與方有下津方男神社而並下瀨民亦有

上津方男神社而對牛瀨其瀑流噴激注而為三瀨者
櫻谷也望之林登鬱紆者佳吉神社也前太守常謁此
廟詠和歌冀神庇焉其下有小戶也今則稍荒廢猶雲
夢昨入飲憶原以南則海洋也曩祖兼直歌曰西之海
穩源之潮道與理現出志佳吉乃神蓋詠之耳予於是
歎良物有理則必有迹與神宜太按之說如合符也昔
者司馬子長登會稽探禹穴李太白以七澤之觀幸荆
州況今靈蹤奇迹在其封內者豈矣衣太守標之新
之也且夫蕩滌中瀨而化生九神者蓋清淨直心而已
矣所謂包天地之表出日月之上蟬蛻於塵區者也若
能擴之而體此心則通之事又遠之事若登風光雪月
之情無處而不至焉按先儒以舞雩為上已被除之所

加旃被襮於四方左氏之所誌在于彼其來尚矣

知哉

天子詔有司修被禱國同亦令寮案修焉凡以六月十
二月為或謂之神事也即謂之政事亦宜豈小小故事
哉今太守被除于茲諷詠于茲斯國向淳素斯民遠
清淨則他日致德堯舜繼職禹稷者其亦庶幾耶於是
乎予不能固辭聊述世史之旨以為記
天和三年五月四日從三位神祇管領下部朝臣兼連
三洲美洞郡高原鄉十高原一部高天原之署下里古
其喜杯荒木田荒木田謂武謂武高高天原之署下里古
震島神社延喜式延喜式今云東霧島宮
奉祀伊奘諾尊并祀同千西震島ノ宮

奉天府北二十六里

靈沼あり

延喜神名式曰日向國諸縣郡一座小震島神社

三代実録天安二年十月廿二日己酉授日向國從五

粒止震島神從四粒下神史同日向國從五

神由親是則高智德神下震島

東御酒滿知權現是亦伊賀諾伊柴丹尊成祀蓋皇

煇の墟名是則高智德神下震島

稜用名是則高智德神下震島

天守閣同郡同郷佐野村衣令祭奉拜是也六月十

狹野神社

天武天皇之廟也

相傳天皇初聖誕于同郡高城此處祀天皇号狹

野權現天文中遷廟于此也

日本紀曰狹野尊亦号神日本磐余彦尊所稱狹野者

是耳少時之号也後撓平天下奄有八州故復加号曰

神日本磐余彦尊神武紀曰天皇諱彦火火出見纂

疏云彦火火出見之名皇祖号者孫可至父之尸故也

因是後世子孫之複名其祖考之諱者起采茲川之

日本府同郡高岡郷志用村之皇石之二十六里

去飛川亦延喜式今作玄川

奉天府東亦三里 同九里半海上

是日分國大川あり河流急峻船不能眩月とのあり法

卒嶺あり

幸麻と同郡飯野郷末永村

自鳥神科天御心也

奉祀神京本武尊

日本武尊景行天皇第一之皇子也二十七年御年

十歳崩す日向國よみ所家ひ終磐の渠首川上魚

卵をば大陽國國長今集人必亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

作此後王長自命賦詩語詞其在天の神靈永も國

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

改まぬ大傍は河原と外と称し其國を改稱を
 其國の地を河原と稱す又の地を改稱す
 日本紀曰伊弉諾尊斬刺過突智命為五段云云其三
 則于化為麓此云數耶磨師是なり
 此地也或真幸と稱之喜式よは真所出也其平
 正心と云人曰吉田等の地ありと稱し又粟津あり
 文祿九年十一月前太守義隆云此を征討すの役
 於此を命ずる夜ありと稱す其地は遠く遠く
 稱す山とみねを命ずる地ありと稱す其地は遠く遠く
 の地なりと稱す其地は遠く遠く
 其地は遠く遠く
 其地は遠く遠く
 其地は遠く遠く

勇にあふなり 河原と外と稱し其國を改稱と
 其國の地を河原と稱す又の地を改稱す
 日本紀曰伊弉諾尊斬刺過突智命為五段云云其三
 則于化為麓此云數耶磨師是なり
 此地也或真幸と稱之喜式よは真所出也其平
 正心と云人曰吉田等の地ありと稱し又粟津あり
 文祿九年十一月前太守義隆云此を征討すの役
 於此を命ずる夜ありと稱す其地は遠く遠く
 稱す山とみねを命ずる地ありと稱す其地は遠く遠く
 の地なりと稱す其地は遠く遠く
 其地は遠く遠く
 其地は遠く遠く
 其地は遠く遠く

なぐやせや甲利を武勇智侯のちやけまといひたりと
みりしを心成臣一あり身成合た各の被もあまも
心の具めは粉まうつひかみりて公の致より及の古き
遠よりけくみりてその我々の我れあとも量さういへは
當今津製妖知の何津養うすぬるあまよあまはよ
うまうしむ采乃人いりうまよあの辰章と並祿を為し
ちよ忠忍の道成をを氏成仁志をの成りありしは
皇と氏の仰の如父母あまうしあま辰陳徳記といふま
云のよと痛しんて武身成りあまよ文章つ讀さるる評
あまい何あまはれ記節章成文と讀ひてあまは
あまよ同郡高城郷東霧島村あま妻方村

都萬霧島神社 亦作妻霧島東霧島

奉祀 木花閨耶姫

杯庭謝祀四十八社あり廟山上に在り

府東北十九里 荒川第十一里

日本紀一書伊弉諾言抜劍斬斬遇突智為三段云々
今此廟側は二の磐石あり大穴取るあり中ハ西あり
截まきりて傳以二版の境ありたり

今 那珂郡宮浦村鷗戸濱
鷗鷗殿神代 塩土 傳俗 作鷗戸 或守土 此 今 孫 飲 肥管内 飲肥 有南 三 里 十 八 町
日本紀曰云々是鷗草葺不合等降誕之處也海濱有
大巖窟南向窟中建廟祀等也

古事類聚 又神代卷の次は最尊天皇の事なり
今又又久止宮 高千穂宮 江田宮 檜間宮
其外其社在末社四十八社あり事多し其
延喜式神名帳日向國兒湯郡小都萬神社
續日本後紀兼和四年八月壬辰日向國妻神預官位
紀三代實錄天安二年十月廿二日己酉授日向國從
五位上都萬神從五位下
今按日向國兒湯郡氣理島郷蓋時安宮
又按日向國兒湯郡日向國志不の月より日向國
即為志不の霧島郷蓋時安宮なり其霧島郷此
年紀の神代卷あり本卷蓋時安宮の事あり蓋時安宮亦
此日向國の事なり蓋時安宮の事あり蓋時安宮亦

高千穂郷蓋時安宮の事あり蓋時安宮亦
附吉東同郡本武村六月おみて寛政元己酉の事なり
大抵此物と形似四阿屋皇宮以て聖之丹朱を以て築
室也未だ其の中より鉄鎧三領劍一把刀九柄圓鑑
三面鉄鏃數本小卷瓶一口皮履若干又曲玉羽玉と
扇及額大小不等等皆珍寶同なり其鎧の札鉤鑑
成りて額屬しその製法と奇なり刀劍を鉄流の爲
柄を木を以て入り蓋時安宮の事あり蓋時安宮の事
蓋し背より鼻鈕あり又神代文の禽獸の形或は陽
或は陰の形あり郭多し篆文の如きあり此の事
後より一々其形不詳神代文字より其或は神代
秦漢古鏡圖と見し其形今も其の如し

時儀云傳是武某の天皇後遺九武傳是古昔の生靈
年といふ今按よ古者大連小連之官あり其世凶禮
致掌るゝと今よんり禮記曰少連大連東夷之子
其善居喪をて孔子稱之の事今加の文集の
我邦王公より庶人よるる皆三年喪を致す佛
氏傳記の端は云々人々一多の事今加の文集の
すの院の成りたるといふ漢字故よ古者上下成
葬禮似甚重矣其所以躬徒之物盡以徇葬詳見于
孝德天皇本紀又筑後風土記云止妻縣縣南二里有
筑紫之君磐井之墓墳高七丈周六丈墓田南北各六
十丈東西各四十丈石人石省各六十枚交陳成行周
迴四面當東北隅有別區号曰衛頭其中有一石人假

容立地号曰解部前有一人腰形伏地号曰偷人側有
石猪四頭号曰賊物亦有石馬三足石殿三間石藏二
間古老傳言磐井生乎之時預造此墓通證曰寬延中
圖考在一條村南長嶺山中石殿今猶全存石人僅遺
其一為左右髻蓋古之俗也梅村載筆曰近泉列岸和
田發掘石棺内外多得石履石合子云史記霍將軍傳
上有豎石前有石馬相對又有石八也又曰天智
子曰漢以來人臣墓有石人羊虎石柱之類又曰天智
紀碑之註曰藥師寺仁足石歌伊波介惠利都又今
接貞享年間所摸鳥下野國那須郡湯津上碑曰朱鳥
元年己丑四月飛鳥淨見原大宮那須國造追大壹那
須宣事提督被賜歲次庚子年正月二壬子日辰節
孫故意斯麻呂等立碑銘德云尔全欠八行行十九字

合百五十字也元當作四即持統三年也詳與郡同訓
見繼躰紀評督領見延曆儀帳又慶長年間山城國高
野主人鑿山得石棺有圭首銜板長可二尺廣可三寸
春頻曰飛鳥津御原宮治天下天皇御朝任大政官兼
刑部大卿位太錦上背刻曰小野老人朝臣之墓營造
歲次丁丑年十二月上旬即葬字躰瘦清時以石函充
人壽訓抄云訓衣比須小野妹子臣之子也丁丑即天
天武六年也又慶長初年創大佛殿於浴東運礮石於
山科掘地得石棺發之衣冠儼然亦有銅板彫刺甲子
姓名而字書不鮮須臾皆朽敗云此可以考碑銘誌
石之古式亦足以觀當時法制之盛意故附之于此云
今此墓の外柳石灰成^りて又塗^り如^きは孝德紀謂棺

漆際會のふれ類^と史記張釋之傳以北山石為棺用
紵絮新陳漆其間索^也新陳絮次漆着其間也文公家
禮治棺内外皆用炭濟^也以^て今此外柳の四阿屋の
如^きあり^し物也即石灰^也と^て塗^り固^くなる^事あり^し也
其玉數顆^は是右俗頂及髻^に嬰^り飾玉あり^し或云冠
弁の裝束也或云飯含の珠あり^し也^{唐書}王送終^{の中}
^{珠玉曰}珠^{あり}飯含^{あり}文出^る孝德紀曰無施珠襦玉押^也通證引漢
董賢傳曰東園秘器珠襦玉押^也以賜賢師古曰珠襦
以珠為襦如鏡狀連縫之^也以黃金為縫要以下玉為押
至足亦縫以黃金為縫^也伊藤氏曰百年前丹波明智
氏采邑土人掘地得一石柳甲有人彷彿似道士之狀
遍解綴珠為衣如鏡甲時呼為廉口袷恐石所謂珠襦

玉匣之類當時百濟最無我親豈傳其制耶蓋古者和漢歩よ表葬其後を重し所謂三年之喪不啻其外番よ至をもふと今至刻六物新志昭著未及伊の圖解白西洋人古昔至貴の諸藥を以て府中よ填實の事見へり日本邦を以て之管仲家の人玉鏡劍を以て葬よ拘るありとあり三益心督仁勇の徳よ象るといふり然る此物ハ王制の世日向の守守りハ人の墓墳ありしとあり後遠之後日本紀天平寶字六年正月後五位下田口朝臣大戸為日向守。天平神護元年十一月奈良唐寺事覺之日仲滿越以靈逆左述日向掾私掾奈良唐橋氏也仲滿時任太納言贈太政大臣武智智磨之子藤原豊成昇也延暦六年閏五月丁巳陸奥鎮守將軍正五位上

百濟王俊哲坐事左降日向權介是より以下三代実録よ至るまでの間日向の守介掾よ到任の人枚挙よ違ありた當時日向守後四位後五位上下の官人これ其官服玉佩の類固是あり又柩喪葬令曰凡墓皆立碑記具官姓名之墓今此物刻字の碑と云く又没字碑と云蓋古俗墓而不墳之謂乎然ハ此所天皇山陵非まじり明皇山未又某誰乃虛墓と云知る所なりは其事成記すを後所考ハ傳るの所なりハ其由ハ詳シしト本家と云なり

日向國名所未考以家ト云了此是改也或ハ何ハ此の由ハちりハ其の里ヨミシキハ此の書ハ出ル所ハ國名ハみハ其の由ハちりハ其の里ヨミシキハ此の書ハ出ル所ハ國名ハ

